サミーという彗星の軌跡

Spec Archives

一方、4号機後期に彗星のごとく台頭したのがサミーだ。

サミー株式会社は1975年に設立された。創業者・里見治の実父が経営していた食品会社の一部門からスタートしたという異色の出自を持ち、パチスロに本格参入したのは4号機時代の半ばからで、業界大手と比べると後発組だった。

それがいかにして最大手メーカーへと成長したか――その答えは2003年に出る。2003年10月に「パチスロ北斗の拳」がホール導入を開始し、後に62万台突破でギネス申請に至るほどの歴史的大ヒットとなった。単なるヒットを超え、パチスロというゲームジャンル全体のステータスを塗り替えた一台といっていい。2004年10月にはゲームメーカー大手のセガと経営統合を行い、持株会社「セガサミーホールディングス」を設立した。北斗の拳が生んだ資本力が、次の時代への布石となったのである。

《コラム》62万台の男たちと、語られなかったカネの話

「言うとみなさんが不愉快になる」――2013年、テレビ番組でパチスロ・パチンコ関連の収入を問われた原作者・武論尊が残した言葉だ。詳細は最後まで明かされなかったが、その一言が逆に、北斗の拳というIPがこの業界にもたらした富の規模を雄弁に物語っている。

初代「パチスロ北斗の拳」がホールに登場したのは2003年10月。リリース当初はCGの映像に馴染めない打ち手からの批判もあり、あまり期待されずにホールデビューを迎えた。しかし火がつくと誰も止められなかった。全盛期には多くのホールで常に満席が続き、20連を超える爆発的な連荘をしている台には立ち見客が集まった。ついには「北斗の拳専門店」までもが登場している。

そして見逃せない事実がある。本機稼働開始の約2年前の2001年、コピー打法騒動により重大な損失を被り、サミーは倒産寸前ともいえる経営危機に陥っていた。北斗の拳の起死回生の大ヒットにより業績が急回復し、人気メーカーの地位を確立するきっかけとなった。62万台という数字は、単なる販売記録ではなく、一社の命運を救った数字でもあった。

この成功が業界にもたらした変化は大きい。北斗の拳を機に、人気漫画・映画・アーティストとの版権交渉がメーカーの重要な競争軸となった。「どのIPを押さえるか」が台の完成度と同等かそれ以上に販売を左右する時代の幕開けだ。北斗の拳は一台の遊技機を超え、業界の戦略地図そのものを書き換えた。

大都技研という異端児

Spec Archives

忘れてはならないのが大都技研の台頭だ。

もともとパチスロ周辺機器メーカーの大都販売の傘下にあった会社が1997年に大都技研と改称し、1998年にメーカーとしての1号機「キャメロットII」を発売した。当初は玄人受けのメーカーとしてシェアも限られていたが、2003年に発売した「吉宗」が約26万台を売り上げる大ヒットとなり、一時は「北斗の拳」（サミー）と並んでホール内を席巻した。2005年の「押忍!番長」もまた約25万台のセールスを記録し、有名メーカーに仲間入りを果たした。

2002年には業界初の順押しAT「ガンガン」、同年には業界初のボーナスBGM選択機能を搭載した「シェイク」をリリースするなど、独創的なシステムで他社が追随する形となるケースが多かった。台の作り込みに徹底的にこだわる姿勢は口コミで広がり、ブランドへの信頼を積み上げた。

NETと山佐――革命を生み続けた技術屋集団

Spec Archives

NETと山佐という2社も、4号機後期の技術進化において見逃せない存在だ。両社はそれぞれ異なる役割で革命をもたらした点が重要だ。

ネット株式会社（旧社名・日活興業）は1996年に現社名で再出発した。良くも悪くも「業界初」となる革命的な機能を持つ機種を多く発表したことで知られ、中でも画期的だったのは2000年発売の「ブラックジャック777」で、業界初の合法ストック機として後にサイレントストックとなり一世を風靡した。ここでいう「合法ストック」とは、ボーナスを内部に貯めて放出タイミングを制御するという仕組みを、規則の範囲内で初めて実現したことを指す。いわば「ストックできる」という扉をNETが開いた。

その扉の先を洗練させたのが山佐だ。「スーパーリノ」ではパチスロ史上に残る発明であるサイレントストックを実現。ここで生み出された「解除テーブル」という用語は、その後5年ほどにわたりパチスロのゲーム性の大前提となった。NETが「合法的にストックする仕組み」を切り開き、山佐が「いつ・どのように放出するか」という解除の設計を洗練させた――その連鎖がAT機・ストック機全盛期の礎を共同で築いたといえる。

スペックの履歴書

～パチスロ規制進化の全記録～

SPEC ARCHIVES...Chronicles of Slot Regulation

～前回の振り返り～

北斗の拳・吉宗・番長が席巻した4号機黄金期から、段階的な規制強化を経て
2007年9月30日に完全撤去が完了するまでの流れを追った。

第5回：群雄割拠【メーカー史①】

～メーカーたちが火花を散らした、あの頃の勢力図～

「あの台、誰が作ってるんだ？」――4号機全盛期のホールで、そう首を傾けたことはないだろうか。

黎明期の〝開拓者〟たち

Spec Archives

パチスロというゲームが世に生まれた1970年代末から80年代、機械の設計思想そのものをつくり上げたのはごく少数の先人たちだった。

北電子は1962年の創業で、1980年にパチスロ事業に参入している。ホールコンピューターや印刷製本という異業種を足場に育った会社が、初期パチスロの基盤技術を担っていた一面がある。

山佐は1967年設立で本社は岡山県に置く。1980年の0号機「パチスロパルサー」からパチスロに参入した老舗で、初期の業界標準を定める機種を次々と送り出した。「パチスロパルサー」以来、独特のリーチ目を持つ機種を多く開発し、1990年代には「ニューパルサー」で一世を風靡。裏モノの蔓延で衰退しかけていたパチスロ業界を支えた。

「ニューパルサー」の発売は1993年4月の4号機最初期。当時のパチスロ総台数は約73万台で、そのシェアは約31%に達した。「どのホールに行ってもニューパルがある」――そう形容されるほどの席巻ぶりだった。

パチスロ黎明期からの古参としてもうひとつ外せないのが、ユニバーサル販売だ。筐体・リール・制御基板をセットで供給し、業界全体に絶大な影響力を持っていた。後年アルゼを経て現ユニバーサルエンターテインメントへと社名を変えるこの系譜は、パチスロの「産みの親」的な立場として別格の地位を占めてきた。

技術介入とユニバーサルの独走

Spec Archives

そのユニバーサル販売が1995年7月に送り出した「クランキーコンドル」は、技術介入の時代を切り開いた。

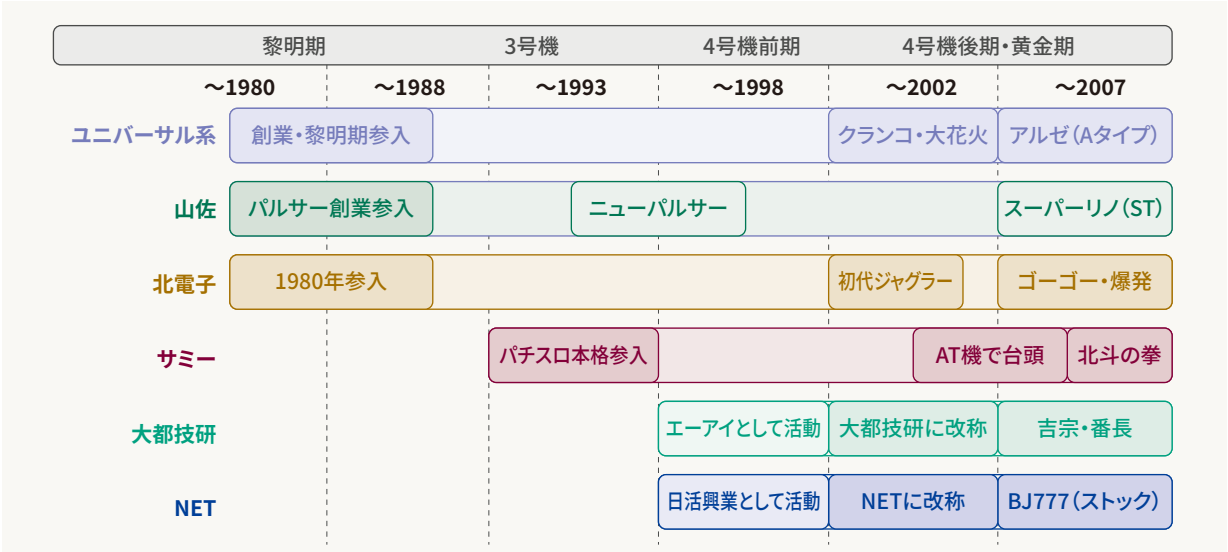
リール制御を大きく変更して本格的な大量リーチ目の搭載を実現したこの機種は、10万台を超えるセールスを果たした。フル攻略ならば設定1でも機械割が100%を超えるという異次元のスペックは、目押し技術を磨いたプレイヤーを狂喜させ、スロプロという職業的遊技者層を爆発的に増やした。

ユニバーサル系の技術介入機は、1997年前後にメジャー機種であれば8～12万台クラスで安定していた。「大花火」（1998年前後）は約20万台に達し、同時期のユニバーサル系がいかにホールを席巻していたかを示している。

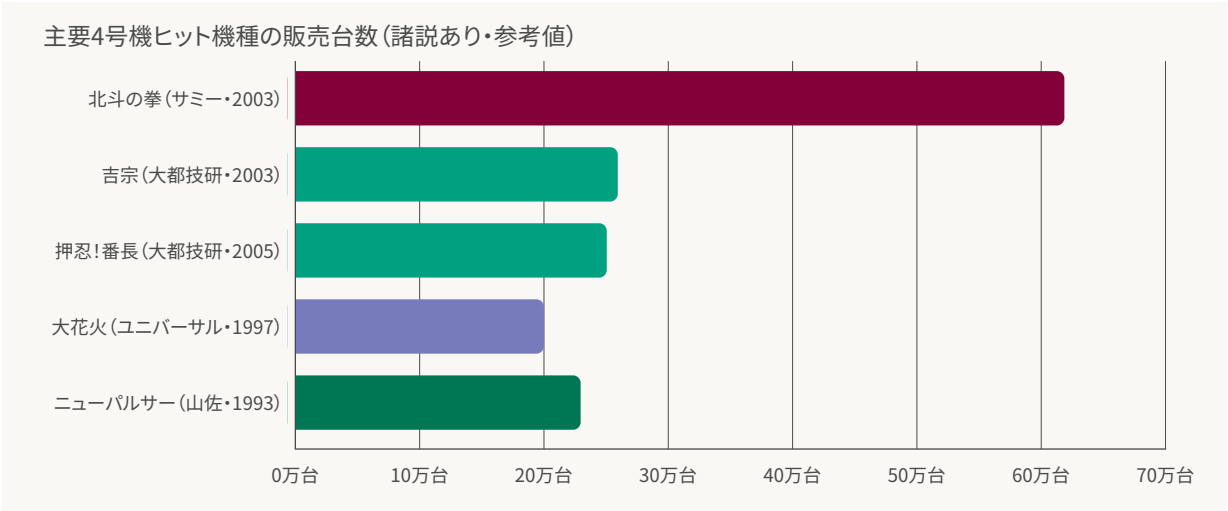
しかし、爆裂ATブームが到来すると状況は一変する。Aタイプの機種がメインだったアルゼはAT機台頭の波に乗り遅れ、追随しても苦戦を強いられることになる。栄光の時代が、皮肉にも「技術介入こそ正義」という信念の強さゆえに裏目に出た格好だった。

クランキーコンドル（1995）
従来からのリール制御を大きく変更して本格的な大量リーチ目の搭載を実現

ここまでが「メーカー史①」の射程範囲だ。以下に主要メーカーの誕生と台頭をビジュアルで整理する。



次に黄金期の勢力バランスをグラフで示す。



このグラフが示すとおり、4号機黄金期の勢力図は「北斗の拳ひとり勝ち」に近い構図だった。だが北斗が抜きん出て突出しているからこそ、吉宗・番長という大都技研の台頭が際立つし、ユニバーサル系や山佐の蓄積が土台として存在していたからこそ、業界全体が高いレベルで競い合う市場が成立していた。

“勢力図”の意味するもの

Spec Archives

4号機時代のメーカー競争が面白いのは、技術の方向性がメーカーごとに全く異なっていた点だ。ユニバーサルは「技術介入・リーチ目の深さ」を武器とし、山佐は「テーブル制御と独自パターン」で差別化した。北電子は「シンプルな完全告知」という真逆の路線で市場を切り拓いた。NETと山佐は「ストック・解除テーブル」という新概念を生み出し、大都技研は「ゲーム性のドラマ」で勝負した。そしてサミーは「圧倒的なIPと爆発力」で全てを塗り替えた。

異なるベクトルを持つ開発思想が衝突し、融合し、進化していく――それが4号機という時代の正体だった。

※本稿に記載の数値等は複数ソースで確認したものですが、集計時期や調査方法により差異が生じる場合があります。参考値としてご覧ください。

［次回予告］第6回 冬の時代～5号機が変えた空気、静まり返ったホールの記憶～

5号機の登場によってホールの空気はどう変わり、各メーカーはいかにして激変した規制と向き合ったのか。